



Pure Pacific 純 No.180 パ Jul.2015

純パの会会報「純パ」第180号

2015年7月25日発行／発行：純パの会

交流戦とオールスター

影山 一義

私たち純パの会員、そしてパ・リーグファンにとって、今季の交流戦を一言で表すならば「痛快」。このように感じた方が多いのではないだろうか。

61勝44敗3分け。交流戦史上最高勝率（.581）、史上4位となる勝ち越し数17、8年ぶりとなるパ・チームによる6試合全勝。そして今季と来季については最高勝率チームとして扱われるために多少意味合いが異なるのだが、交流戦最高勝率だったホークスの「交流戦V5」もパの強さの1つとして挙げていいだろう。

昨年の今ごろ、交流戦は試合数の削減問題が現実的なものとなり、結局、それまでのホームとビジター2試合ずつの24試合制が、対戦カードごとにどちらか一方での本拠地での3連戦、18試合制に削減された。交流戦開始当初のホーム・ビジター3試合ずつの36試合制からは実に半減である。表向きは日程編成上の問題ということではあるものの、一方で各マスコミではセ・リーグ側が同一リーグ内の人気カードを削減されていることでのデメリットを指摘し、そして私を含め多くのパ・リーグファンは「これ以上パとセの実力差をさらされたくないのでは？」と感じたものである。

それでも個人的に唯一期待したのは、パとセの勝利数がある程度拮抗するのではないか、という点。今思えばたいした根拠でもないのかも知れないが、3連戦で開催していた最初の2年間の勝ち数が意外にも？ パセで拮抗しており、2連戦制となって以降パとセの勝ち数差に明らかに開きが目立つようになってきたように感じていたので、そのあたりは多少是正されるかと思っていたのだが、序盤はセが優位に進めていたように見えて

も、終ってみたらあれだけの大差。交流戦終了後の論調もさることながら、リーグ戦再開後に生じた「世界恐慌」と呼ばれる、セ全チーム勝率5割以下という事態が、パとセの実力差を、改めて世間に示す結果となった。

そのような交流戦が終って、1カ月後に行なわれたオールスターゲーム。あれだけのパとセの大差を見た後で、パ・リーグファンとしては、オールスターでもパの選手たちが再びセを圧倒するだろうと期待してみたら、意外なことに2試合ともセ・リーグ打線に打ち込まれてのバの敗戦。

成績に直結する真剣勝負での交流戦とは違い、あくまでもお祭りであるオールスターではそう目くじら立てることもないだろうという意見もあったり、また私自身も普段の試合とは違う視点で楽しく観ることはできるのだが、どうしても対戦成績という数字を目にしてしまうと、気分が変わってくるのもまた事実。

今年の2試合が終ったところでパの80勝に対しセが77勝（引き分け10）、交流戦開始以降の11年間に絞ればパの7勝に対しセは16勝（引き分け2）も挙げている。気がつくとも勝ち数の差が3まで詰まってきたのが気にかかるとは、今のところ見当たらぬ。

私自身は今でもパ・リーグには、セと相まみえる交流戦、オールスターゲーム、日本シリーズでは、何が何でも相手を圧倒して勝って欲しいと思っただけだが、今やそういう考えは、ひょっとしたら古い考えとなっているのではないかと、交流戦とオールスターゲームの結果を目の当たりにして、複雑な心境になるのである。